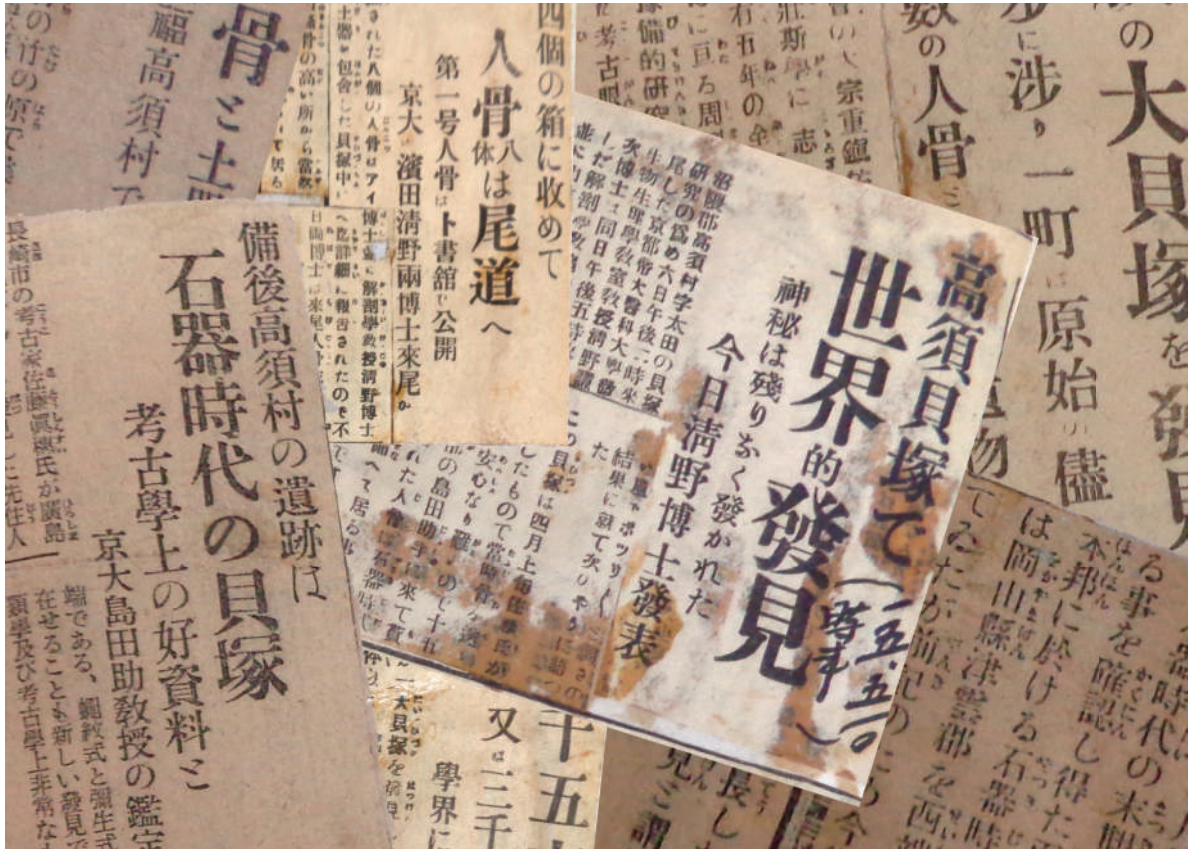


CONTENTS

「太田貝塚」の発見・・・1頁  
 広島県史跡太田貝塚の発掘調査・・・2-3頁  
 「太田貝塚」出土資料調査レポート・・・4-5頁  
 村田四郎とシュシ・スライマン・・・6頁



太田貝塚発見当時の地元新聞記事(尾道市立中央図書館蔵「大正4年 新聞社に関する書類綴込」より)

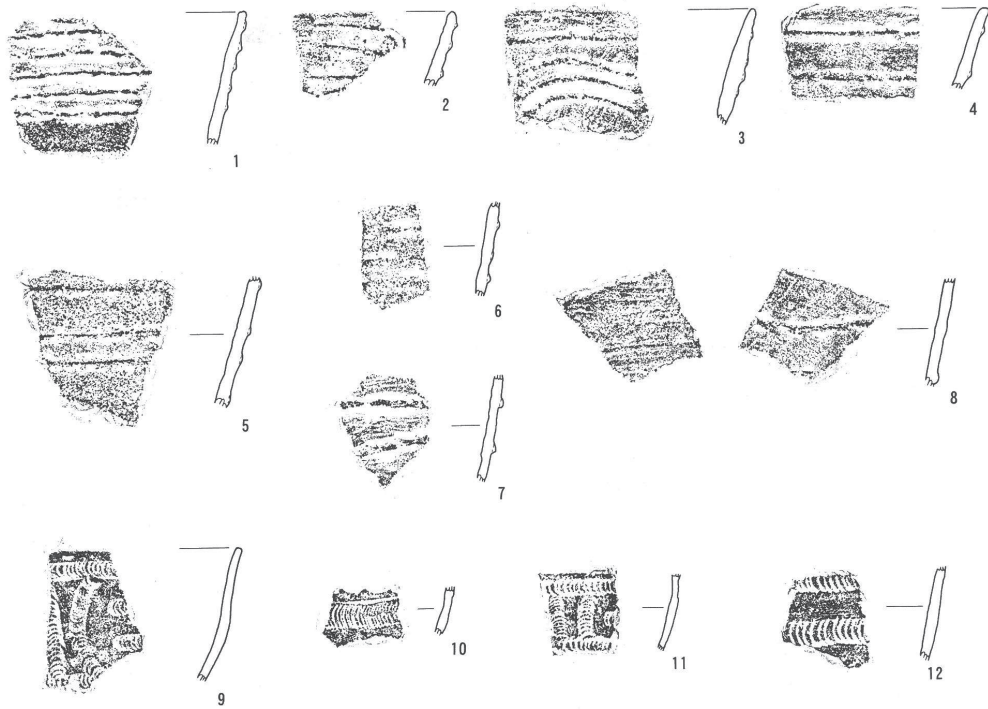
コロージュ写真の中央記事「高須貝塚で世界的発見」は大正15年(1926)5月に、地元紙「備後時事新報」に躍った見出しで、高須貝塚とは尾道市東部の高須町大田地区に所在する「太田貝塚」(県史跡の指定では太田と表記した)になります。太田貝塚の発見は、尾道市文化財保護委員会顧問等を務めた村田四郎らによるもので、京都帝国大学(現京都大学)に報告したところ、同大学の清野謙次博士(きよのけんじ)らが発掘調査を行ない、その存在が明らかになりました。70体以上にも上る人骨とともに、縄文の土器・石器・骨角器、さらには貝塚と呼ぶもとなる廃棄された貝類から動物の骨などが多量に出土し、にわかに注目を集めることになりました。

以降、戦前戦後、平成期にわたって計7回の発掘調査が実施され、縄文時代、だけにとどまらず、古墳時代の遺物も確認される複合的な遺跡であることが判明しています。

出土品は個人、県教委、市教委の所蔵の他に、「京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室において、「清野コレクション」として収蔵されています。その内の一部が令和5年(2023)の秋に尾道市立美術館で開催された展覧会(ニユーランドスカップシュシ・スライマン展)において併設展示され、時を超えた里帰りが見られたという経過になります(展覧会での紹介については裏表紙のコラム参照)。

なお、太田貝塚の史跡地一帯は宅地化が進んだ現状にありますが、一角に石碑と案内板が建つ史跡公園が整備されています。

※：太田貝塚については、既刊の『新尾道市史』文化財編上巻の中にも収録されています。太田貝塚発見の詳細は尾道市文化財協会発行「尾道市文化財ニュース」創刊号・第2号に村田四郎自身が記しています(『尾道市文化財春秋』の合本に収録)。



太田貝塚出土遺物実測図

『尾道市埋蔵文化財調査報告 第43集 尾道市内遺跡—尾道遺跡ほか埋蔵文化財調査概要—平成21年度』所収  
(尾道市教育委員会、平成23年3月)



太田貝塚出土遺物  
(京都大学大学院理学研究科自然人類学教室蔵  
「清野コレクション」、八幡浩二撮影)



現在の太田貝塚



## 広島県史跡太田貝塚の発掘調査

企画財政部文化振興課 西井 亨

発掘調査風景 (平成13年2月)

尾道市太田貝塚は松永湾の西岸部、尾道市高須町内に所在し、西から東へのびる標高約3mの微高地に立地しています。後世の埋立や干拓によって、現在では松永湾の汀線より約1kmも奥まった地点にありますが、かつては海浜に面していたものと考えられます。

太田貝塚は、大正15年(1926)に発見されて以降、京都帝国大学の清野謙次等による発掘調査が行われ、70体以上の人骨の他、縄文時代の土器・石器(石斧・石鏃・石錘・敲石・板状石材等)や、多量の骨角器をはじめ、各種の貝類や動物骨といった自然遺物も多く出土しています。

ただ、調査時期が大正時代、昭和時代前半と古く、また、調査機関も京都帝国大学や広島県教育委員会など市外の機関であるため、太田貝塚全体の詳細な出土資料記録の把握が難しいという課題があります。

昭和56年(1981)の調査では、明確な遺構は検出されず、縄

文土器や古墳時代の土師器、中世の土器などが出土しています。縄文土器は、縄文時代前期と縄文時代後期に属するもので、縄文(縄の文様)の他に隆起帯がつくもの、爪を押し込んだような爪形文、太く深い溝を刻む沈線文などの模様により、時代を区別することができず(次ページの図を参照)。

平成13年(2001)の調査でも縄文土器が出土しています。爪形文などがつく縄文時代前期の土器や竹などの道具で文様がつけられた縄文時代中期の土器などがあります。

このような土器につけられた文様や形により、縄文土器は年代を区別するため、その文様が良く分かるように図のように墨で拓本をとり、その右側には土器の形が分かるように断面図で表します。

『新尾道市史資料編考古・古代・中世』では、太田貝塚についてもその調査の歴史や出土資料について詳しく紹介する予定です。これまで、京都大学や福山市など、出土資料を所蔵する機関を訪ね、資料の把握と記録を行ってきました。そうした調査成果とあわせて、太田貝塚の重要性をお伝えできればと思います。

# 太田貝塚

## 出土資料 調査レポート

八幡 浩二 福山市立大学 都市経営学部 教授。尾道市文化財保護委員、尾道市史編集委員会専門部会（考古・古代）委員。専門分野は日本考古学。

### 日本屈指の古人骨「清野コレクション」と日本人起源論

京都大学大学院理学研究科自然人類学教室では、「清野コレクション」と呼ばれる日本屈指の古人骨（縄文時代）の資料を所蔵しています。清野謙次（1885〜1955）は、京都帝国大学医学部を卒業後、同大学の助手・講師・助教授を経て、教授を務めた医学者です。と同時に、若い頃から考古学や民俗学にも興味があったことから、日本列島における古人骨（縄文時代）の発掘・収集を進め、日本人起源論を追究した人類学者でもありました。

当時の日本人の起源をめぐる「ブレアイン説」（エドワード・S・モース）や「コロボックル説」（ジョン・ミルン、坪井正五郎）、また「アイヌ説」（ハイインリッヒ・P・シーボルト、小金井良精）がありました。こうした説は、いずれも現代の日本人とは直接繋がることはない、いわゆる「人種置換説」というものでした。

そうした中で、清野は人骨の各部位の長さの比率などを測定したところ、縄文人骨が現代日本人とも現代アイヌの人々とも類似点と相違点があり、両方を合わせて持っているという結論を導き出しました。つまり、現代日本人は縄文人がベースで、その後外來の人々との混血によって誕生したものであり、日本人の直系の先祖だと主張しました。こうした清野の学説は「②混血説」と呼ばれるものです。

なお、清野が想定したような大量の移民はなく、縄文時代から今日までの体質の変化は、生活様式の変化によるものが大きいとする長谷部言人（1882〜1969）の見解も提起され、清野の混血説に対して「③変形説（小進化説）」と呼ばれることになりました。それ以降、両学説（②と③）は日本人の起源をめぐる二大潮流となり、現在ではDNA解析といった最新の手法を用いた研究も進められております。

さて、話を少し戻しますが、清野が日本人種論を展開する上で、重要

な役割を果たしたのが、愛知県田原市に所在する「吉胡貝塚（国史跡）」、岡山県笠岡市に所在する「津雲貝塚（国史跡）」、そして、広島県尾道市高須町に所在する「太田貝塚（県史跡）」（遺跡名は「大田」と「太田」の両表記がみられるが、小稿では「太田」で統一する）から出土した人骨群です。なお、清野の主要な業績としては、戦後に『古代人骨の研究』に基づく「日本人種論」（1949年）、『日本考古学・人類学史』（1955年）、『日本貝塚の研究』（1969年）の3部作が岩波書店から刊行されていますので、ご興味のある方は、ご一読ください。

清野が収集した膨大な資料群や蔵書からなる「清野コレクション」については、清野の没後、詳細な経緯は明らかではないものの、残念ながら複数の大学や博物館へ移管されることとなったようです。そのうち出土人骨に関しては、冒頭で述べたように、京都大学大学院理学研究科自然人類学教室で所蔵されています。

### 「太田貝塚」出土資料の現在

前置きがかなり長くなってしまいましたが、いよいよ本題に入りたいと思います。ところで、清野が収集した人骨の中で、太田貝塚出土の資料は、現在どのような状態にあるのか。また、その種別や量はどのくらいあるのか。といった情報については、これまで全く未知の状態でありました。



太田貝塚出土の人骨等

設に伴って、調査が行われた弥生時代の集落跡「曾川1号遺跡（尾道市御調町）」、中世山城跡の「家ノ城跡（尾道市木ノ庄町）」や「牛の皮城（尾道市御調町）」など、そして現在の尾道市街地に位置する中・近世の都市遺跡である「尾道遺跡」などなど、これまでの考古学的な調査で得られた縄文・弥生・古墳時代から古代・中世・近世までの多岐にわたる遺跡を紹介する予定ですので、ぜひ楽しみにしててください。そして、本巻（考古資料）を通じて、足下に眠る尾道の歴史の一端を知っていただければ、幸いです。



尾道遺跡出土印花双鳥文白磁碗



尾道遺跡土層

具体的な作業としては、「広島県太田貝塚」と付されたケースの中身を1箱ずつ確認しながら、記録（メモと写真撮影）を進めていきました。途中、構内の北部食堂にて昼食休憩をし、無事に15時前に作業を終了いたしました。結果、合計61箱分の確認を行いました。人骨だけではなく、当初は全く予期していなかった考古資料（土器・石器や、自然遺物（貝類・骨角）を僅かながらも確認できたことは、大きな成果でした。

作業後、中務教授へ簡単な報告と鍵を返却し、京大を辞去いたしました。帰路は、行きと同じルートで、京都駅まで向かい、駅構内でお土産を購入してから、17時7分の新幹線（のぞみ95号）で、福山駅には18時29分着。

先述したように、今回の資料調査では人類学考古学史上著名な「太田貝塚人」を実現することができ、また新たな知見も得られるなど、短時間ながらも有意義な時間を過ごすことができました。



太田貝塚出土の人骨等

また、それから数か月後には、尾道市立美術館で開催された展覧会『NEW LANDSKAP shooshie shūman ニーランドスカップ シュン・スライマン展』（会期…2023年9月16日（土）〜11月12日（日））の展示で、京都大学所蔵「清野コレクション」（太田貝塚出土人骨）と再会することができました。

その際、尾道に里帰りした太田貝塚人に向かって、「お帰るなさい」とこっそり呟いたことを記しておこう。

### 『新尾道市史資料編考古・古代・中世』の内容をご紹介します！

最後に、令和5（2023）年度刊行予定の『新尾道市史資料編考古・古代・中世』について、ここでは考古資料について、内容をほんの少しだけ紹介してみたいと思います。

その前に、本資料編の副題について、触れておきましょう。一見すると、副題の「考古・古代・中世」の併記に関して、「古」と「中世」は、大きな意図があって用いられています。そもそも、歴史学において過去を復元する上で、重視する材料には、多くの種類がありますが、とりわけ、文字で書かれた文献や金石文は、狭義の「史料」という字が用いられています。その一方で、考古学（遺跡）や民俗学（口頭伝承など）などが扱

うものも含めて、広義の「資料」と

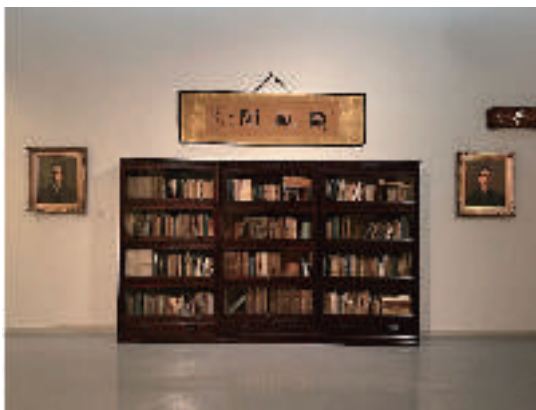
いう言葉が広く用いられています。ちなみに、出土文字資料である木簡は、それ自体は考古学の資料であるとともに、そこに書かれた文字は史料でもあるわけです。つまり、一般的には「資料」は、史料をも含めた広い概念として、使用されているといえます。

また、副題の古代・中世は、「歴史をはかるものさし」として、歴史家によって便宜的に時代区分されたものですが、それに対して考古（学）とは、時代区分ではなく、人類の誕生から現在までを準備範囲とし、人類が遺した遺跡（痕跡やモノ）を研究することによって、歴史を復元する学問です。こういったことから、今回の本資料編の副題では、敢えて「古」と「中世」の表記で区別を行うこととなった次第です。言い換えれば、そこには市史編さん委員会の強い意図（拘り？）があるというわけです。

ところで、『広島県道地図』によれば、尾道市には内陸部から沿岸部・島嶼部にかけて、372遺跡（旧尾道市131、旧田島市52、旧豊田郡瀬戸田町20、旧御調郡御調町155、旧御調郡向島町14）が周知の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）として挙げられています。このうち今回の資料編で取り上げる考古資料は、学史上著名な「太田貝塚（尾道市高須町）」をはじめ、古墳時代における松永湾岸の遺跡（黒崎山古墳や大元山古墳、満越遺跡など）、また近年の中国横断自動車道尾道松江線の建

そこで今回、市史編さん事業の一環として、現状確認を目的とした資料調査を尾道市文化振興課の西井亨さんと実施いたしました。2023年2月27日（月）福山駅で合流し、7時41分の新幹線（のぞみ94号）で京都へと向かいました。京都駅には8時59分着、地下鉄烏丸線で今出川駅へと。そこから京都御所に沿って、徒歩にて京都大学吉田キャンパス（北部構内）に……。アポの時間（10時30分）まで、少し余裕があったので、キャンパス内を少しだけ徘徊して、京都大学大学院理学研究科2号館にある自然人類学研究室の事務真人教授を訪ねました。挨拶をした後、早速資料室へと案内していただき、そこで簡単な説明を受け、部屋の鍵を渡されました。資料室の壁側2面に資料棚が置かれ、そこにはラベル（資料番号・遺跡名・採集年月ごとに整理された）が張られたケース（中性紙保存箱）がびっしりと配架されていました。

## 村田四郎とシュシ・スライマン



今秋、尾道市立美術館で開催された「ニューランドスカップ シュシ・スライマン展」は、現代アートをテーマとした当館開催の展覧会としては、過去最高の入館者数(12,069名)を達成しました。

シュシ・スライマンは、10年前にアーティスト・イン・レジデンスで尾道を訪れ、アートの現場として選んだのが、旧市街斜面地の元八百屋の廃墟でした。シュシさんは、制作を継続的に進める中、その家の元大家・村田四郎を知り、その生涯を学ぶことにより、尾道での創作意欲が高まり、本展最後の展示室では、村田四郎を紹介するコーナーまで設ける存在となりました。その中で、村田四郎が持つ太田貝塚発見者であるという一面から京都大学所蔵「清野コレクション」の古人骨(縄文時代)など太田貝塚出土資料も

展示されました。

村田四郎は、明治22年(1889)、広島県世羅郡吉川村(現世羅町)に生まれ、日彰館中学を経て、上海に開校された幻の名門校と謳われる東亜同文書院を卒業します。25歳の時に帰郷し、尾道村田家の養子となり、呉服商を営むかたわら、戦中、「倭寇」研究の先鞭者として『八幡船史』を刊行し、全国にその名を馳せました。戦後は文化財保護委員会顧問を務めるなど郷土史の研究に勤しまれ、昭和45年(1970)、その生涯を閉じられました。

昭和、平成と時代が過ぎ去る中、尾道の人々にも忘れられようとしていた人物が、令和の世に東南アジアを代表するアーティストにより、再び脚光を浴び、現代の人々にその名は刻まれました。

尾道が繋ぐ国や時代を越えた不思議な縁を感じざるを得ない展覧会となりました。  
梅林 信二(尾道市立美術館学芸員)



### 『新尾道市史』刊行計画

市制施行一二〇周年にあたる平成三十年度(二〇一八)を振り出しに、令和十年度(二〇二八)までの十一年計画で、新市域を網羅しての『新尾道市史』を編さんします。今後の刊行スケジュールは次の通りです。

令和五年度(二〇二三)

文化財編 下巻

資料編 考古・古代・中世

民俗編

資料編 近代・現代

令和六年度(二〇二四)

地理編

令和七年度(二〇二五)

通史編 原始・古代・中世

令和八年度(二〇二六)

通史編 近世

令和九年度(二〇二七)

通史編 近代

令和十年度(二〇二八)

通史編 現代

### 史資料や情報をお寄せください

古文書や古写真(写真絵葉書を含む)、古地図、尾道的话题を報じる古新聞など、市史編さん委員会事務局では、幅広い分野において尾道に関わる史資料を収集しています。また、無形の伝承(地域に伝わる言い伝えや独特な慣習、祭礼芸能等)についても収集対象となります。もし皆さんのお宅や周辺で、あるいは地域で、そうしたものが発見された場合は、事務局へご一報ください。史資料については複製(写真撮影・コピー)を取らせていただくのみで、現物については速やかにお返しさせていただきます。情報提供は下記の事務局連絡先までお願いします。お電話での受付時間は平日8:30~17:00です。(文化財係:0848-20-7425)

### 編集後記 \* 2024.1

今回は、尾道市立美術館で開催された「ニューランドスカップ シュシ・スライマン展」で展示された県史跡・太田貝塚にスポットを当て、専門の先生方に解説をしていただきました。本誌で考古資料を取り上げるのは初めてでしたが、いかがでしたでしょうか。今後も皆様に楽しんでいただけるように市史の活動についてお知らせしていきたいと思っております。

太田貝塚については『新尾道市史 文化財編 上巻』(平成31年3月発刊)にも掲載されています。よろしければお手に取ってみてくださいね。(I.M.)

※『市史広報』は年に2回程度の発行を予定しております。  
みなさんの様々なお声や情報をお待ちしております。